

OMU

大阪公立大学人権問題研究センター

RCHR

第198回サロンde人権

「死んだほうがいい」が問いかける もの 安楽死をめぐる言葉をさぐる

～障害者支援の現場にいるからこそ見えること～

話題提供：渡邊 琢氏

(日本自立生活センター事務局員

NPO 法人日本自立生活センター自立支援事業書介助コーディネーター・相談支援専門員)

2026年5月『「死んだほうがいい」が問いかけるもの 安楽死をめぐる言葉をさぐる』(岩波書店)を上梓

7月27日(月)

午後2時～4時

大阪公立大学

人権問題研究センター共同研究室

定員 対面 10名 オンライン 100名

事前申込・先着順

無 料

ちょうど10年前、「重度の障害者は安楽死させるべきだ」と主張する男が、19人の障害者を殺害する事件を起こしました。京都で7年前に起きた「ALS 囑託殺人事件」の背景には、スイスで安楽死を選んだ日本人女性のドキュメンタリー番組があったとされます。

安楽死をめぐる事件や報道が増え、障害や病を指して「あんなのだったら死んだほうがいい」と言われやすい空気が私たちの間に漂っています。「生きたい人は生きたいいいけど、死の権利も認めてほしい」とも言われますが、それですむ話でしょうか。

本話題提供では、障害者支援の経験に基づく訴えに耳を傾け、人々が「死んだほうがいい」と口にしてしまうわけを考えたいと思います。

参加希望者は人権問題研究センターのホームページお問い合わせフォームより

前日正午までにご連絡ください。(<https://www.omu.ac.jp/orp/rchr/contact/>)

定員に達し次第締め切りとさせていただきます

お問い合わせはセンターまで <https://www.omu.ac.jp/orp/rchr/>